

令和 8 年度 入学 試験 問題

総合問題(教育支援専門職養成課程・心理コース)

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答はすべて別紙解答用紙に記入下さい。
3. 解答用紙は3枚です。
4. 解答方法が論述方式の場合は、1マス目から書き始め、1文字空けた
り、改行したりせずに横書きで書き進め下さい。
5. 各解答用紙には、受験番号を記入する欄がそれぞれ1箇所あります。
すべて記入下さい。
6. 試験終了後、問題冊子は持ち帰り下さい。

次の文章を読み、以下の問いに答えなさい。

道端に電信柱の丸太が転がっていた。

男の子が、その丸太にぴょんと飛び乗って、両手を広げてバランスをとりながら渡って行った。反対の方向から来た男の子も丸太の端に飛び乗り、前進してきた。

二人の男の子は丸太の中央で出会った。そして、落としっこをはじめた。男の子は片方の男の子を丸太から落とし、さらに進んで反対側の端にたどり着き、勝ち誇ったように氣勢を上げた。落とされた男の子は反対の方にかけて行き、再び丸太に乗って中央に歩きはじめ、また落としっこを始めた。二人はくたびれるまで、いく度となく繰り返した。

このような光景を誰でも見たことがあるだろう。あるいは子どもの頃にこんなあそびをしたかもしれない。

あそびとは、この丸太にぴょんと飛び乗るような、突然で飛躍的なものだと思う。どこまで落ちないでバランスをとって行けるかと挑戦するゲーム、そして落としっこというゲームも加わる。

そういう突然で飛躍的なゲームを子どもたちは発見し、発明してしまうから、子どもたちはあそびの天才だといわれるのだろう。

大人にとっては道端の丸太にすぎなくても、彼らにとってはすばらしいあそび道具になる。子どもたちは地上何メートルにわたされたブリッジで格闘しているような夢にひたっているのである。

しかし、彼らが思いきりあそんでいる横を車がぶんぶん通り過ぎたらどうだろうか。丸太は単なる汚い、倒れている電柱でしかないことを思い出させてしまう。

あそびには、気持ちの余裕も空間の余裕もなければならないのは、大人も子どもも同じである。子どものあそびが飛躍的で、突然的で、ゲーム的であればあるほど、気持ちと空間の余裕が必要なのである。

子どもはあそびの天才だから、どこでもいつでもあそびを発見し、発明することができるとうよく言われる。しかし、それにはやはり豊かな環境——余裕のある気持ちと空間——があって、という前提が必要ではなからうか。(中略)

日本の子どもたちのあそび時間は、平均して約4時間から5時間の間である。そ

れは多少、少なくなっているが、今も昔もさほど変わらない。その内容が変化している。子どもたちに、一日どのくらいあそんでいるかと聞いてみると、2時間半ぐらい(横浜での調査)という。実際の子どもの自由な時間は4、5時間あるのだが、子ども自身があそんでいると実感している時間はその半分ぐらいになっている。

1955年ごろ、子どもたちの外あそびの時間は2.7時間もあった。それがすでに1975年ごろには、1.4時間に減っている。そのかわりにテレビを見ることが子どもの生活時間に大きな部分を占めるようになった。

外あそびがなぜこのように少なくなっているのかといえば、いろいろな原因が考えられるが、中でも次の二つの要因が大きく影響しているのではないだろうか。一つには子どもたちが、塾やおけいこごとが忙しく、一緒に同時にあそべる時間がなかなかとれないということである。ならいごとや塾は日本の場合、週に4～6時間くらいある(名古屋、横浜での調査)。

二つ目には、テレビやテレビゲームのあそびの方が外あそびに比較して、子どもたちにとって魅力のあるものになってしまっていることがあげられる。

八丈島でテレビが見られるようになったのは比較的遅く1965年だが、テレビによって、子どもたちのあそびの集団が小さくなり、外あそびが減ってしまったと報告されている。

たしかに外あそびや集団あそびは、気の弱い子ども、内気な子どもたちにとって苦痛である場合がある。昔はあそび集団に入らなければあそべないから、必死であそびの集団に入った。しかしいま、一人あそびが好きな子どもにとって、テレビやテレビゲームがともだちになってくれるところがある。

横浜での調査では、12年ほど前は70%の子どもがあそび時間が少ないとっていたのだが、1989年の調査では、少ないと答えた子どもは35%に減り、50%の子どもはちょうど良いと答えている。このことは、日本の子どもたちがあそびの欲求そのものを失ってきていることを表しているように思える。

あそび時間、あそび空間、あそび集団、そしてあそび方法というあそび環境の4つの要素は、この20～30年の間に急激に変化し、相互に影響しあい、その結果いま、日本の子どもたちは外あそびの熱意を失っている。(中略)

① 子どもの数が少なくなっていることは、もちろん少子化傾向の現れとしてここ近

年極めて著しくなっている現象で、全国的な傾向でもある。私は子どもの数が少なくなるといふこと自体はそれほど大きな問題ではないと考えるが、都市部において小中学校が廃校に追い込まれ、子どもたちがあそぶ仲間もなく、孤立的な状況に追い込まれるのは問題であると思う。

子どもたちにとって、きょうだいも友だちも多ければ多いほどよいと私は思う。ある程度の子ども集団ができる環境のなかで子どもを育てるということ、大人たちは配慮する必要があると思う。(中略)

子ども調査研究所の斎藤次郎さんは長年子どもたちのあそびの活動をみてこられた人であるが、私とのある対談でこのようにいわれた。

「僕の子ども時代、毎日暗くなるまで外であそんでいましたね。でも、あそびたくてあそんでいるという事ではもちろんあるんですけども、考えてみれば、うちにいたってろくなことはないわけですよ。親に用を言いつけられるか、用が思いつかなければ宿題やれとか勉強しろとか、訳のわからないことをいわれるわけでしょう。それに、うちの中におやつらしいものがあるわけでもない。外に行って、進駐軍^{注1)}のジープが通りかかれば、もしかしたらガムにありつけるかもしれない。季節季節のザクロだとかイチジクだとか、よそのうちの庭からとってくることもできます。家に閉じこもってられない同じ境遇の友だちがいっぱいいるわけですよ。だから、自然に群れになります。だけど今の子は、わざわざ外にでてみんなとあそぶといった内的必然性があるのかな、と思うのね。うちの中で冷蔵庫をあければおやつはあるし、飲物はあるし、お母さんはあまり文句いわなくて、何か気がねしているみたいな感じだし。自分の部屋にはいればなにやってもわからないし、テレビもファミコンもあるし、漫画もあるし。これでな外にでて鬼ごっこやるといふのは、何かわざわざという感じになるのじゃないかって、僕は思うんだよね」

都会の子どもたちと毎日接していてその生態を熟知している人の発言として、大変重く聞こえた。

それでも私はこう考える。ミュンヘンの子どもたちもファミコンを持っている。もちろん個室もある。にもかかわらず、外であそぶ時間はずっと多い。ミュンヘンの子どもたちが日本の子どもたちと異なるのは、空間的にも時間的にも余裕があり、そして大人と一緒にあそんでいることだ。テレビやテレビゲームよりは、やは

り子どもは外にでてあそびたいのだ。ただ日本では、外あそびの空間がなくなっていることが最大の要因となっていると思われる。(中略)

あそび時間、あそび空間、あそび集団、あそび方法といったあそび環境の要素に影響を与えるのは、社会構造、文化構造、都市構造である。社会構造としては地域社会の衰退、核家族化、産業形態の変化、少子化などが考えられ、文化構造としては情報化、合理主義、消費主義、知育主義、安全第一主義など、都市構造としては自然の喪失、車優先主義、住宅の合理化、都市の効率機能化などがあげられる。これらがあそび環境の四つの要素を支配しているのである。

私たちは、悪化の循環を逆流させなければならない。そのためにはまず、これらの社会構造^②、文化構造、都市構造を見直し、そして子どもたちのあそび時間、あそび空間を確保することから始める必要があると思う。

日本の子どもたちのあそび環境は、現在大きく変化しようとしている。それは、第二の変化ともいえるのではないかと思っている。

第一の変化は、1960年をピークにした日本の高度成長と軌を一にしている。都市化による影響を受け、子どもたちのあそび空間が極めて小さくなり、テレビ等の影響、核家族化、コミュニティの喪失などにより、あそび集団が減少していった変化である。

第二の変化は、1980年から始まっている。あそびの空間は限界まで小さくなり、分解が始まっている。子どもたちはかつての原っぱのような、虫とりができ、木登りをし、缶ケリをやり、鬼ごっこもできるような総合的な空間を失っている。虫とりをする林、缶ケリをする小さな空き地……というように、あそびの機能に分解された小さな空間を求めて歩き回らなければならなくなっている。子どものあそび文化という側面からいえば、テレビゲームによる子どもたちの自閉化が進行している。子どもたちの数が少なくなり、子どもたちの影が町からますます見えなくなっている。都市よりも地方で、地方よりも田舎で、子どもたちのあそびの環境は近年急激な変化をみせている。田舎の子どもたちの方があそばなくなっている。第一の変化を縮小の変化ととらえるならば、第二の変化は質的な変化ではないかと思われる。(中略)

この第二の変化が今後どのくらい加速されるか、私にも見当がつかない。しかし^③

第一の変化と質的に大きく異なる第二の変化がはじまっていることは確かである。その変化を見ずえ、子どもたちのあそびの時間と空間の再構築の方法を、私たちは考えねばならない。

仙田 満(1992). 子どもとあそび 岩波書店(一部改変)

注1：進駐軍 他国に進軍してそこに駐屯している軍隊で、特に第二次大戦後、日本に進駐した連合軍の俗称を表す。

※原文は1992年に発刊された書籍であり、現代とは状況や背景が異なっている。

問1 筆者が、「日本の子どもたちは外あそびの熱意を失っている」^①と述べたことについて、筆者はあそびをどのようなものと考え、どのようなことに問題意識を持っているか。本文を踏まえて300字以内で説明しなさい。

問2 筆者が、「悪化の循環を逆流させなければならない」^②と述べたことについて、どのような方策が有用と思われるか。本文を踏まえて、300字以内で具体的な方策をいくつか挙げなさい。

問3 筆者が、「この第二の変化が今後どのくらい加速されるか、私にも見当がつかない」^③と述べたことに関して、あそび環境の発刊当時(1992年)と現代との類似点と相違点について、本文を踏まえてあなたの考えを400字以内で述べなさい。